

## 兵庫県北部における伝統的な植物利用 —編組製品に着目して—

角谷由美子<sup>1)</sup>\*・高橋晃<sup>2)</sup>\*\*

### Traditional plant use in the northern part of Hyogo Prefecture: On the knitted and woven items

Yumiko SUMIYA<sup>1)</sup>\* and Akira TAKAHASHI<sup>2)</sup>\*\*

#### 要 旨

兵庫県北部には、今でもハイイヌガヤ・マタタビ・スゲなどで作った自家製編組製品が残っている。それらには身近な植物を利用してきた先人たちの知恵が凝縮されているが、その素材植物を採集できる人や、植物利用の方法を記憶している人の高齢化が進んでいる。そこで、兵庫県北部の香美町を中心とした地域でアンケート調査を行うとともに、詳しい聞き取りや現認調査により現在も残っている編組製品を調べた。さらに素材の採集・加工方法についても調べ、この地域で昔から行われてきた、あるいは現在も行われている植物利用について記録した。調査からは自家製編組製品の現状や、材料に選ばれる植物の道具に適した特性、たとえば、ハイイヌガヤの枝は曲げやすい、マタタビはタケの材料より柔らかく使い心地がよい、スゲの葉は水はげがよく軽いなどが明らかとなり、この地域における植物利用の特徴や、植物の採集・加工方法における知恵の伝承について考察した。

**キーワード：**兵庫県北部、編組製品、植物利用、ハイイヌガヤ、スゲ、知恵の伝承

(2016年7月31日受付, 2016年11月15日受理)

#### はじめに

植物を使って物を結んだり、かごに編んだりという、いわゆる編組製品は縄文時代の遺跡からも発掘されている。たとえば佐賀県東名遺跡では、縄文早期の約7,000年前のカゴが多数出土し、それらはさまざまな植物とさまざまな編組技法を使って作られていたことがわかってきた(佐々木ほか, 2014)。編組製品は当時からすでに

日常生活に密着した大切な道具であり、現在にまで至っていると考えられる。それらの製品には身近な植物を利用してきた先人たちの知恵が凝縮されており、人と自然の共生を考えるうえで有効な自然利用の形と考えられる。しかし近年、プラスチック製品の普及などにより自然の植物素材を使った編組製品を利用することが少なくなっている。

兵庫県北部ではハイイヌガヤやマタタビ、スゲなどを

<sup>1)</sup> 兵庫県立大学大学院環境人間学研究科 〒670-0092 兵庫県姫路市新在家本町1-1-12 Graduate School of Human Science and Environment, University of Hyogo, Shinzaike-Honmachi, Himeji, Hyogo, 670-0092 Japan

\* 兵庫県立人と自然の博物館 地域研究員 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Museum of Nature and Human Activities, Hyogo; Yayoigaoka 6, Sanda, Hyogo, 669-1546 Japan

<sup>2)</sup> 兵庫県立大学自然・環境科学研究所 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Institute of Natural and Environmental Sciences, University of Hyogo; Yayoigaoka 6, Sanda, Hyogo, 669-1546 Japan

\*\* 併任：兵庫県立人と自然の博物館自然・環境再生研究部／コミュニケーション・デザイン研究ユニット 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Division of Ecological Restoration / Study Unit of Communication Design, Museum of Nature and Human Activities, Hyogo; Yayoigaoka 6, Sanda, Hyogo, 669-1546 Japan

Corresponding author: takahasi @ hitohaku.jp

使って作った自家製の編組製品が残っているという報告がある（美方町文化財審議委員会，1999，2000，2002，2003；榎，2004）が，これらの記録以後詳しい調査はなく，現在の状況は不明である．自家製編組製品を作る植物材料を採集できる人や，植物利用の方法を記憶している人の高齢化が進んでいる現状の中で，今聞き取り調査や素材の実地調査によってそれらの製品を調べ，実際に植物利用がどのようになされてきたかを記録することは急務である．

これまで，編組製品は主に民俗学や民具学などの観点から研究されており（宮本，2005；磯貝，1985a, b；名久井，2011），植物の民俗学的な利用についての記載（倉田，1969；宇都宮，1970；長沢，2012）などもある．これら先行研究からは編組製品や利用植物などは日本全国で共通しているものもあるが，各地方で独自の要素もあることがわかり，地域に根ざした編組製品の調査や植物利用の実態を調査する必要がある．兵庫県北部においては兵庫県教育委員会（1970）が美方郡小代地区（現在香美町小代区）の熱田・小長迎を中心に民俗全般についての調査をし，民具の一覧も記載している．その後，美方町文化財審議委員会（1999，2000，2002，2003）が小代の民具を調査し，その中で地区において使われてきた編組製品の名前・用途・素材などを紹介している．榎（2004）は，旧城崎郡長井村（現在の香美町香住区大谷地区）の昭和はじめの生活を記載し，その中で藁製品，マタタビやスゲの製品の名前・用途・素材などについて紹介した．また，植物と人との関わりについては，細見（1999）が，丹波・但馬の植物の地方名や利用，歴史民俗について記している．しかし，これらは自家製編組製品を取り上げ，植物利用を中心に書かれているわけではない．

そこで，本研究では兵庫県北部の編組製品に着目して，植物利用の観点からアンケートや聞き取り調査をおこない，現在も残っているそれらの製品の呼び方をはじめ用途や使用状況を，さらには素材の採集方法や加工方法も調べて伝統的な植物利用の実態を記録し，この地域の植物利用の特徴を明らかにすることを目的とした．

### 調査地

調査は，兵庫県北部の美方郡香美町でおこなった．兵庫県北部は古くから但馬と呼ばれてきたが，香美町は但馬地域の北西部に位置しており，但馬北東部の豊岡市，但馬南部の養父市・朝来市とは，三川山（888 m），蘇武岳（1,074 m），妙見山（1,139 m），鉢伏山（1,221 m）などの山々によって隔てられている．香美町は香住区・村岡区・小代区の3区よりなり，アンケート調査は香美町全域を対象エリアとして実施したが，聞き取りおよ

び現認調査は村岡区と小代区で行った．なかでも村岡区大笹地区において集中的に聞き取りし，また植物材料の採集・確認は大笹地区及びその西側に位置する八チ北高原周辺で行った（図1）．

香美町は，総面積 369.08 km<sup>2</sup>，林野が 86% を占め，町の中央部を南北に流れる矢田川水系に沿って，耕地や居住地を形成し，人口は約 2 万人である（香美町，2005）．気候は日本海型気候に属し，年間を通して多雨多湿で，冬期は山間部を中心に積雪が多く，豪雪地帯に指定されている．香美町内には縄文・弥生・古墳時代の遺跡や遺物が点在し，古くから人々の暮らしが営まれてきた（香美町，2015）．古代より山陰道が現在の養父市から村岡区を抜け，新温泉町を経て鳥取に通じており，各地との人々の交流が行われていた．中世以降，土着の豪族の領有などの変遷を経て山名氏が治めていたが，明治以降，廃藩置県や町村制の施行，町村の合併などを経て現在に至っている（香美町歴史文化遺産活性化実行委員会，2013）．

香美町を構成している香住区・村岡区・小代区の3区は，合併前にはそれぞれ異なる町，香住町・村岡町・美方町として独自の歴史をもっている．内陸側の村岡区・小代区は前述の 1,000 m 級の山地に囲まれており，平野部では稲作が行われ，山間部では但馬牛飼育や高原野菜の生産が行われてきた（香美町歴史文化遺産活性化実行委員会，2013）．積雪のため農作業ができない冬には，各地へ酒造りの出稼ぎに行く者が多かった．一方，日本海に面した香住区にはカニ漁などで賑わう漁港があり，北前船の寄港地としても栄えたことが知られている（兵庫県の歴史散歩編集委員会，2006）．

### 材料と方法

#### 対象とした編組製品とその素材植物

香美町村岡区・小代区での予備調査で，民家にはいろいろな編組製品が残っていたが，この地域で特徴的と思われる自家製編組製品として背負いカゴ・腰カゴ・ザル・背負い袋・背負い縄・ミノを調査対象とした．ミノを対象としたのは，ビニール製の雨合羽が使用されるまでミノは必需品で，自家製であるために，地区の植生やその植物の特性が反映されると予想したからである．予備調査の時点でこれらの編組製品の素材植物のうち調査地域において特徴的に用いられる植物はハイイヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K.Koch var. *nana* (Nakai) Rehder ・ ツヅラフジ *Sinomenium acutum* (Thunb.) Rehder et E.H.Wilson ・ マタタビ *Actinidia polygama* (Siebold et Zucc.) Planch. ex Maxim. ・ ワラ（イネ *Oryza sativa* L. のことであるが便宜上「ワラ」と表記する）・

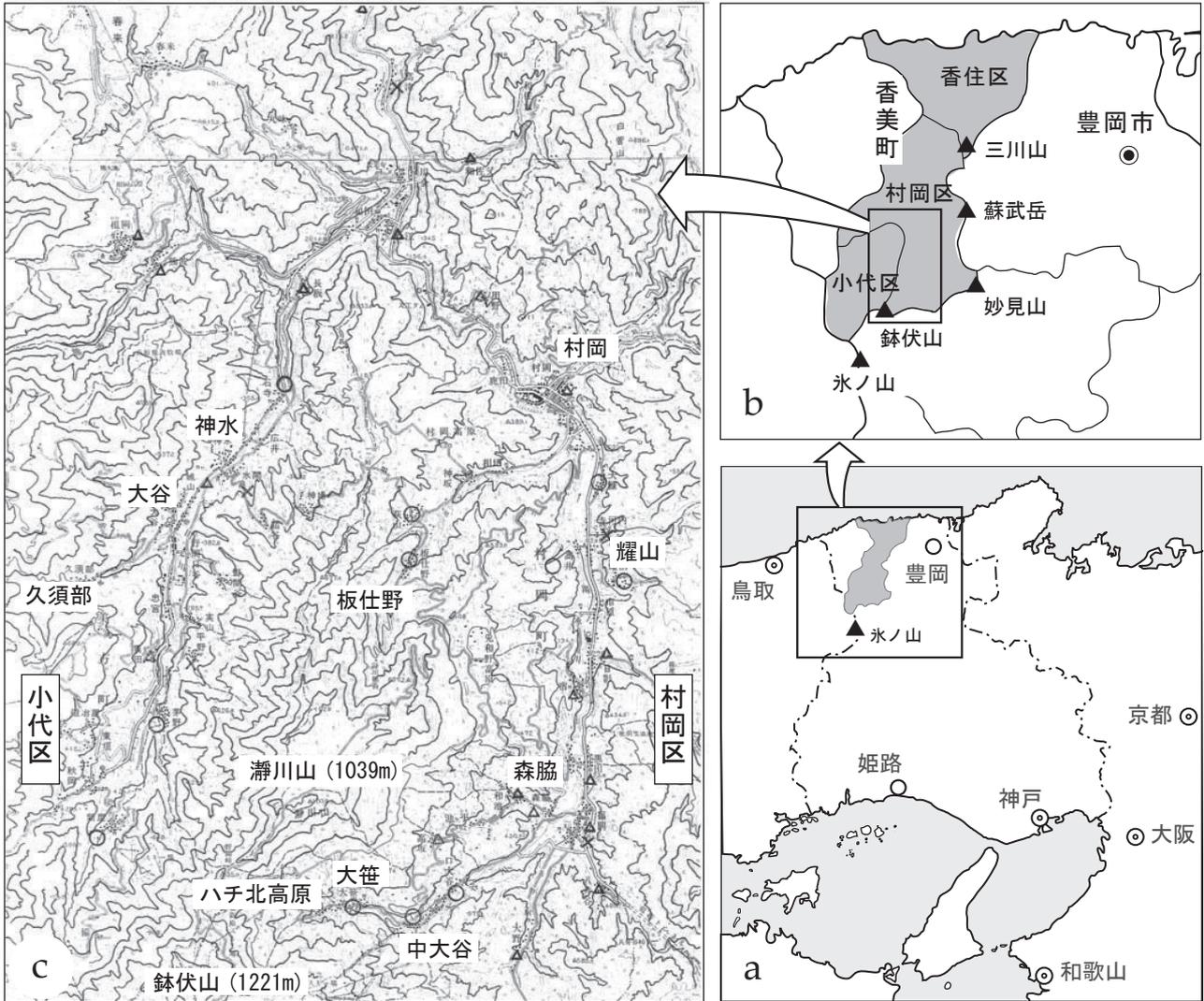


図1 調査地地図。 a. 兵庫県；b. 香美町；c. ハチ北高原周辺。(cは、平成5年修正国土地理院5万分の1地形図に加筆)。

シナノキ *Tilia japonica* (Miq.) Simonk.・スゲ属 *Carex* spp. (後述するように、スゲ属植物のうちカンスゲ *Carex morrowii* Boott 1種は特定できたが、他に類似種が多数あり、素材として用いられる種が限定されるかどうかの検討ができていないため便宜上「スゲ」と表記する)であることがわかったので、これらを中心に調査を進めることとした(表1)。これらを含め、本文中で取り上げた植物のうち聞き取り及び現認によって植物学上の種名を確認したものについては、初出の際に学名を付記した。学名は米倉・梶田(2003-) (付記3参照)に従った。

#### 素材植物の採集場所

村岡区大笹地区において、自家製編組製品製作の昔の状況について知る人の同行により、ハイヌガヤ・ツヅラフジ・マタタビ・シナノキ・スゲの採集場所を確認した。ハイヌガヤ・シナノキ・スゲは、大笹地区(標

高約500m)から標高800~1,000mの山地まで上がり、その一帯に広がる落葉広葉樹林の林内や林縁部で採集したということで、そのような場所を「奥山」とした。ツヅラフジ・マタタビは集落の裏山の斜面などに広がる雑木林で採集され、そのような場所を「里山」とした。その他、家の近くに自生している植物を採った場合は「近く」、栽培している植物を使う場合は「栽培」とした。アンケート及び聞き取り調査では、採集場所に関するこれらの用語を用いた。

#### アンケート調査

自家製編組製品のおおよその傾向や現状を調べるためにアンケート調査を実施した。アンケートは香美町教育委員会の協力により、香美町老人クラブに依頼した。その内容は「民具の素材と製作に係るアンケート」とし、①呼び方・素材について(呼び方・使用状況・材料・採集場所・加工方法・入手方法)、②その他のカゴなどの

表1 対象とした自家製編組製品の主要な素材植物。

道具	植物名
背負いかゴ	(骨組み) ハイイヌガヤ <i>Cephalotaxus harringtonia</i> (Knight ex Forbes) K.Koch var. <i>nana</i> (Nakai) Rehder (巻くもの) ツツラフジ <i>Sinomenium acutum</i> (Thunb.) Rehder et E.H.Wilson
腰カゴ	マタタビ <i>Actinidia polygama</i> (Siebold et Zucc.) Planch. ex Maxim.
ザル	マタタビ <i>Actinidia polygama</i> (Siebold et Zucc.) Planch. ex Maxim.
背負い袋	ワラ (イネ) <i>Oryza sativa</i> L.
背負い縄	シナノキ <i>Tilia japonica</i> (Miq.) Simonk.
ミノ	スゲ属 <i>Carex</i> spp. (カンスゲ <i>Carex morrowii</i> Boott)

植物利用について、③民具の製作・利用について詳しい人の紹介、④アンケートの記入者・年齢・性別・地区などについて尋ねた。調査は香美町全体でおこない、村岡区と小代区では地区ごとに、香住区では小学校区ごとにおこなった。アンケート調査票の一例を付表1に示した。

#### 現認調査と聞き取り調査

村岡区では教育委員会収蔵庫、小代区では古代体験の森・教育委員会収蔵庫において民具を現認調査した。さらに自家製編組製品の材料・採集場所・加工方法などを詳しく調べるために、個別の民家を訪問して民具調査と聞き取り調査を行った。大笹地区では6人から話を聞くことができ、村岡区中大谷・森脇・耀山地区、小代区の神水・大谷地区でも聞き取り調査を実施した。

#### 素材植物の特性調査

編組製品の素材植物は、表1に示されたように、道具によってそれぞれ異なる植物が用いられている。これは各植物のもつ特性が異なり、用いられる道具に適した植物が選ばれているものと考えられる。このことを検証するため、編組製品の素材植物の特性や製作過程で行われている加工方法の違いについて調べた。

背負いかゴの巻くものとしてツツラフジがあげられたが、調査地域周辺で容易に入手可能なツツラフジ以外のツル植物数種を用いて、実際に巻いた時の巻き易さや巻いた後のようす、ツルの内部構造の違いについて比較し、ツツラフジのツルがどのような特性をもっているかを検討した。マタタビ・シナノキ・スゲに関しては、採集季節や加工過程について調査した。マタタビでは文献情報や聞き取りで判明した加工方法を実際に試した。それに加えて、シナノキでは水に浸して繊維状にすることも試みた。スゲについては、季節ごとに採集して引き抜き易さを比較し、また生の葉と一定期間水に浸けた後の葉の内部構造の比較観察や、ミノ材料にする乾燥した葉の水に対する特性についてワラとの比較も試みた。

## 結 果

香美町老人クラブにおけるアンケートは、2014年11月に実施し、54部配布して41部回収した。回答者は70代がほとんどで、そのうち80才以上の人でも41%を占めていた。これら高齢の人たちからは、50～60年前に祖父母が作っていたときの状況も聞き取れた。回収したアンケート41部の地区の内訳は、村岡区73%(30部)、小代区20%(8部)、香住区7%(3部)と村岡区の比率が高いため、村岡区での状況がより多く反映されているものと思われる。

アンケートからは自家製編組製品に関して多様な回答が得られており、個々の編組製品についてのアンケート集計と聞き取りによって得られたデータをまとめ、巻末に付表2として付けた。そのなかから主要な特徴を抜き出し、聞き取り調査等の結果をあわせて自家製編組製品の現状を表2にまとめた。また、各製品の現在及び過去の使用割合をグラフにして図2に示した。

#### 背負いかゴ

##### ①呼び方、用途、使用状況

背負いかゴ(図3a)は、地域ではサラクチと呼ばれていることが多い。また、サルクチ・背負いと呼ぶ人もいる。畑仕事の道具や苗、採集したものを入れたり、堆肥を入れたりした。その他、野菜の収穫時に座ったまま採った野菜をかゴに入れたり(図3b)、かゴを逆さにして踏み台にしたりなど(図3c)、多くの使い方があることがわかった。大きさは、高さが約40cm、上部の直径が約45cmほどであるが、大・中・小といろいろなサイズが使われていたという。

アンケートでは、現在も使用している人は24%、過去に使用した人も49%いて、合計が70%を超えている(図2)。背負いかゴは、山地に近い地区で現在も使用されている傾向があった(図4)。ほとんどが自家製で、現在も作っている人がいる。近くの人や親戚からももらった場合もある。子どものときに、背負いかゴで背負って

もらったり、子ども用の背負いかゴを作ってもらったりしたという話も聞いた。

村岡区板仕野地区と小代区久須部地区で、実際に使用しているところが見られた。板仕野地区では、家から少し離れた山地上部にある畑へ行く際に、苗や道具をかゴに入れて背負って歩けるので重宝しているとのことだった。久須部地区では、牛糞を入れて運ぶのに使っていた。香住区山田地区ではサラクチという背負いかゴは使っていなかったという回答があった。

## ②材料

### 2-1 骨組み

骨組みは曲げた木の枝で、その枝にツルや縄を巻きつけて作る。材料の骨組みの部分はアンケートや聞き取りによれば、圧倒的にヒビ、ヒビノキという回答が多い。大笹地区での聞き取りにより、ヒビ、ヒビノキはハイヌガヤであることがわかった。現地でハイヌガヤの枝を採集し曲げてみたところ、採集後しばらくの間はしなやかで曲がりやすいことがわかった。

他に、ガエ・ガエマツ・ガヤとの回答もあった。細見(1999)によれば、ガエ・ガヤはチャボガヤを指している。大笹地区の聞き取りでも同様にチャボガヤ *Torreya*

*nucifera* Siebold et Zucc. var. *radicans* Nakai であることがわかった。ヒノキの枝・スギの枝・タケという回答もあった。

### 2-2 巻くもの

骨組みに巻くものは、カズラ・ツヅラとの回答が多い。ツヅラと呼ばれるツルはツヅラフジを指すと思われる。大笹地区での採集の際に、ツヅラがツヅラフジであることを現地で確認した。中大谷地区や板仕野地区の背負いかゴでも、骨組みの枝にツヅラフジを巻いていた。

骨組みのハイヌガヤの枝にツルを巻いた時の状況を、ツヅラフジと他のいくつかの植物とで比較したところ、ツヅラフジが一番巻きやすく、しっかりと巻きつけられることがわかった(表3)。ツルの断面で見ると、ツヅラフジの木部はフジほど多くなく、クズほど少なくなく、表皮はアケビより薄い。木部には比較的はっきりとした放射組織が多数通っていて、表皮をはがして茎の内部構造を見ると、放射組織で隔てられた筋状の木部が束になっていることがわかった(図5)。この構造がツヅラフジのツルの柔軟性を生みだし、土台のハイヌガヤの枝に沿ってよく曲がりびったり巻きつくものと考えられる。またツヅラフジのツルは、10年以上経って硬くなった

表2 聞き取り及びアンケート調査による自家製編組製品の現状。

道具	呼び方	用途	現在使用している (%)	入手方法	現在の作り手	素材植物	採集場所
背負いかゴ	サラクチ	道具や苗・採集した物を入れる、堆肥を入れるなど、多用途に使用	24	ほとんど自家製。近くの人や親戚からもらう	いる	ハイヌガヤ ツヅラフジな どのツル ワラ	里山 奥山
腰カゴ	サデコ	腰につけ、山では栗の実などを入れ、海辺では魚などを入れるのに使用	42	自家製が多い。もらう、購入する場合もある	ほとんどいない	マタタビ タケ	里山 奥山
ザル	ソウケ	米とぎや水洗いした野菜の水切りなどに使用	46	自家製が多い。もらう、購入する場合もある	ほとんどいない	マタタビ タケ	里山 奥山
背負い袋	コシズ	道具や収穫した野菜などを入れるのに使用	19	ほとんど自家製。もらう、購入する場合もある	いる	ワラ	栽培 奥山 里山
背負い縄	オイソ	背負いかゴにつける、採集した物を背負うときの縄などに使用	21	ほとんど自家製。もらう、購入する場合もある	いる	ワラ シナノキ	栽培 里山 近く 奥山
ミノ	ミノ	雨の日やカゴを背負う時の背当て、泥よけなどに使用	2	ほとんど自家製。もらう、購入する場合もある	いない	スゲ ワラ	奥山 里山 近く

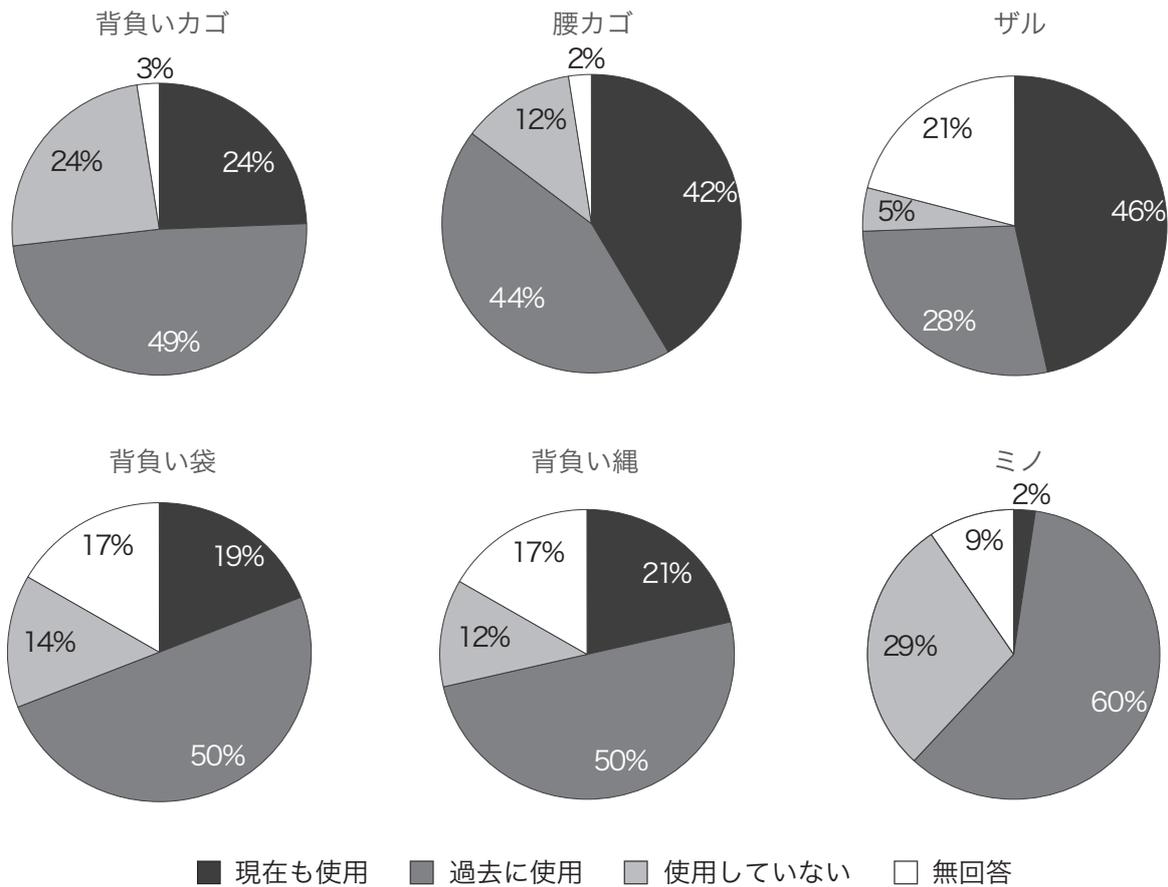


図2 自家製編組製品の使用状況。回収したアンケート41部のなかの各回答数の割合を示した。各製品とも、過去に使用、現在も使用を合計すると約6～8割となり、この地域ではよく使用されていたことがわかる。腰カゴとザルは現在も使用の割合が4割超と今でも重宝され、背負いかゴ、背負い袋、背負い縄も約2割使用されている。一方、ミノは現在ほとんど使用されていないが、過去に使用された割合が6割で一番多く、昔は必需品であったことがわかる。

ものでも水に浸ければ使用できるとして、民家に補修用として保存されている例もあった。このような構造的な特性や、長期間を経ても使えるという便利さにより、ツヅラフジが巻くものとして選ばれたと考えられる。

他に、縄を巻く（ワラ縄・シュロ縄）という回答もあった。また、骨組みはそのまま使い、ツルや縄・紐を巻き直して今でも使用している場合や、骨組みにビニール紐などを巻いたり、プラスチックのかごに背負いヒモをつけたりする例もある（図3d）。

### ③採集

材料の採集場所は里山との回答が20人で最も多かったが、8人が奥山にも採集に行ったと回答している。板仕野地区で背負いかゴを使用していた人によると、しっかり巻けるツルは集落のそばでは採集しにくく、遠くまで採集に行った。しかし、最近ではなかなか見つけるのが難しく、採集できないとの話であった。聞き取りやアンケートによると、8月頃までの夏季だと採集したツルから虫が発生するため、秋から冬に採集したことがわかった。

### ④加工

骨組みを作るときには、採集してきた枝を生のまま曲げたり、熱湯につけたり、火であぶったりして曲げ、骨組みにする。聞き取りによると、背中にあたる部分は平らにして、痛くないようにした。ツルは天日干しして、使うときに水に浸けてやわらかくして使用した。骨組みになる枝を針金でしばって曲げた形にし、倉庫などに保存されている場合があった（図3e）。またツルも保存されており、これらは補修用として使用した（図3f）。

### 腰カゴ

#### ①呼び方、用途、使用状況

腰カゴは地域ではサデコと呼ばれる場合が多く、山菜を採集して入れたり、拾ったクリの実を入れたりする。図6に示した腰カゴは編み目がそろい、形も美しい。大きさは高さ約20～25cmである。

現在使用している人は42%、過去に使用したという回答も44%あり、昔からよく使用され、今も使用され



図3 背負いカゴ。 a. 背負いカゴ，骨組みはハイヌガヤ，巻いているのはツヅラフジ； b. 座ってもそのまま野菜などを入れることができる； c. 逆にすると踏み台になる； d. 左：プラスチック背負いカゴ，右：ビニールヒモ背負いカゴ（いずれも現代版）； e. 補修用の枝； f. 補修用のツル。

表3 ハイヌガヤの枝に巻いたツルの比較。 フジ，アケビ，クズ，ツルウメモドキのツルは，2014年12月に大阪府泉南郡熊取町で採集したものを使用。 ツヅラフジについては中大谷地区に保存されていたツルを使用した。

植物名	巻いた状態	ツルの断面	巻いた時の特徴
フジ <i>Wisteria floribunda</i> (Willd.) DC.			木質部分が多く硬い
アケビ <i>Akebia quinata</i> (Houtt.) Decne.			乾くと皮がむける
クズ <i>Pueraria lobata</i> (Willd.) Ohwi			木質部が少なく，乾くと折れやすい
ツルウメモドキ <i>Celastrus orbiculatus</i> Thunb. var. <i>orbiculatus</i>			巻くときに芽の突部が手に当たり，巻きづらい
ツヅラフジ <i>Sinomenium acutum</i> (Thunb.) Rehder et E.H.Wilson			枝に沿って巻きやすい

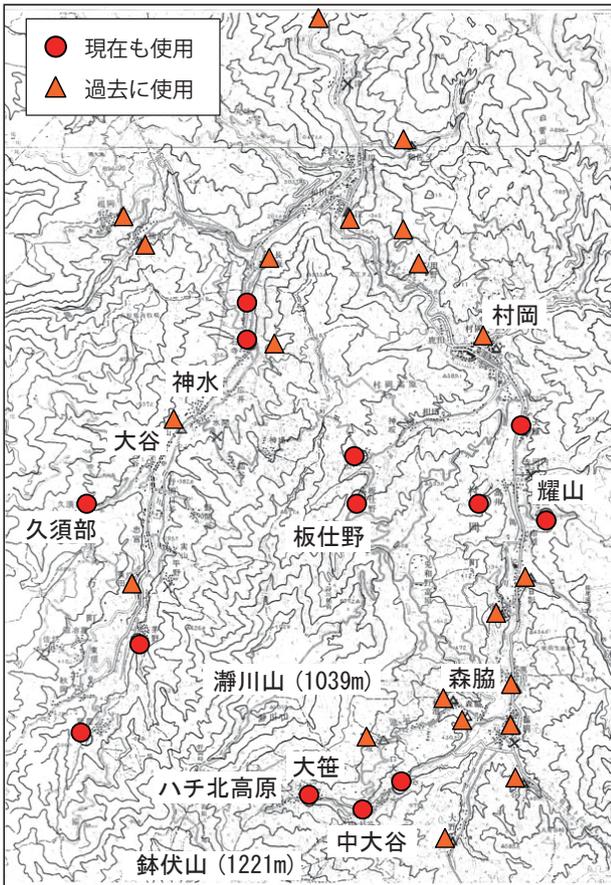


図4 ハチ北高原周辺地域における背負いカゴの使用状況。現在もなお背負いカゴが使用されている地点は、山地に近いところが多い。標高の低い所で使用されている場所は、上に棚田などがある地区である。(図1-cと同じ地図を使用)



図6 マタタビ製腰カゴ(サデコ)。



図5 ツツラフジのツルの維管束。ツルの表皮を剥がして内部の維管束を取りだしたところ。

ている道具であることが確認できた(図2)。小さなカゴなので腰につけて使用した。自家製が多いが、現在作っている人はほとんどいないと思われる。近くの人にももらったり、購入したりする場合もあった。中大谷地区の聞き取り調査では、周辺にある竹屋が作って売っていて、タケ製の腰カゴを購入したことも多かったという。道の駅で郷土品として売っているという回答もあった。

#### ②材料

使われた材料はワタタ・ワタダ・マタタビとの回答が多い。大笹地区の聞き取りで、ワタタ・ワタダと呼ばれるものはマタタビであることを確認した。細見(1999)にもマタタビをワタタ・ワタタビと呼んだとの記述がある。次にタケとの回答も多いが、これは①で述べたようにタケ製の製品を購入したことを意味しているものと思われる。材料にヤナギやツツラフジという回答もあった。

#### ③採集

材料の採集場所は里山が17人と多く、奥山も9人であった。マタタビの葉は梅雨時期に葉の表面が白くなり遠くからでも認識しやすいため、その時期に場所を特定しておいて採集の目安にしたという話を聞いた。聞き取りでは、昔と比べて近い所では採集ができなくなったという回答があった。

#### ④加工

マタタビは、今年伸びた新しい枝を採集し、切り口を水で浸し、皮をむき、枝の太さに応じて縦に4, 3, 2のいずれかに分割し、髄を取り除いて編む材料にする。割った後に天日干しをしたり、湯で煮たりもしたという回答があった。マタタビを泥につけて皮をはぎ、乾燥させるという回答もあった。

マタタビはタケに比べて柔らかく、編むこと自体は高齢者や女性でもでき、主たる稼ぎ手が出稼ぎに出た冬期に製品が作られた。ただし、ツルを均等に割る作業には熟練が必要で難しかったということである。板仕野地区の人から「父が器用で、出稼ぎに行かなくなってから、知り合いの人にサデコを作って提供したところとても喜ばれた」という話も聞いた。昔はマタタビのツルを割る技術をもった人が、冬前に編む材料を揃えていたものと思われる。

カゴの口にツツラフジを巻いている例もある。カゴの首にあたるところが細くなっているが、大笹地区では編む際に中へ小さな鉢を入れてその形を作ったということである。

## ザル

### ①呼び方、用途、使用状況

ザルはこの地域ではソウケ（ソーケ）やザルと呼ばれる（図7）。呼び方には、丸ソウケという形をさすもの、あみソウケという編み組みをさすもの、米洗いソウケという用途をさすもの、ワタタソウケ・タケソウケという材料をさすものがあった。

ザルは、といだ米や水洗いした野菜の水切りなどに使われた。

現在使用している人は46%、過去に使用した人は28%あり、ザルも腰カゴ同様、昔から使用され、今もよく使われている道具であることが確認できた（図2）。大笹地区で「ギンナンをザルに入れ、水につけて踏んで皮を取る」という話を聞いたが、マタタビのザルは柔らかく水はけもよくて使いやすいため、このような作業に使われたと思われる。



図7 マタタビ製ザル（ソウケ）。

今使用されているザルは自家製が多く、60年以上使っているという例もあったが、現在作っている人はほとんどいないと思われる。以前は、村の上手な人や親戚に作ってもらったり、購入したりする場合もあった。昭和20年ごろまで他村の人がタケ製品を売りに来たという回答や、行商人から購入したという回答もあった。現在は道の駅で郷土品として売っているという回答もあった。

### ②材料

材料は腰カゴと同様、ワタタ・マタタビという回答が最も多かったが、タケという回答も多かった。ヤナギ・ツツラカズラ・ツルという回答もあった。

### ③採集

採集場所は里山が18人と最も多く、奥山と回答した人も8人いた。

### ④加工

腰カゴの場合と同じように、採ったマタタビの枝を水で浸し、皮をむき、枝の太さに応じて縦に4, 3, 2のいずれかに割るという加工が行われた。また、タケの皮の部分を薄く割り、細くして使うというアンケートの回答があったが、「タケの皮」がタケのどの部分をさすのか確認できていない。

## 背負い袋

### ①呼び方、用途、使用状況

袋は地域では、コシズと呼ばれることが多い（図8a）。聞き取りでは、道具や採集した山菜などを入れ、小さい袋は腰に下げ、大きい袋は背負ったということである。過去から現在まで使用した人は合計69%いたが、現在も使用している人は19%に減っている（図2）。自家製がほとんどであるが、親戚や近くの人にもらった、シュロ製のを購入したという回答もあった。シュロは大きな葉を有するヤシ科の木本で、シュロ製の袋は恐らく、葉鞘から採る繊維で縄をない、そのシュロ縄で編んだものと思われるが、現物を確認していない。聞き取りでは背負い袋を現在も作れる人がいることがわかった。

### ②材料

ワラ縄で作られたという回答が圧倒的に多い。ワラ縄は稲ワラのことである。ワラ縄以外は、ヒルカワ・ヒロガワ・スゲ・ヒルリ・ヒルという回答があり、聞き取りによれば、ヒルカワ・ヒロガワはシナノキを、ヒルリ・ヒルはスゲを示していると思われる。他には、麻・シュロ・シウロ・ビニールなどの回答があった。

### ③採集場所

これらの採集場所は、栽培が多く、次に奥山、里山という回答が続く。ここでいう栽培は、ワラ縄が材料という回答が最も多いことからわかるように、ワラにするイネの栽培を示しているものと思われる。

### ④加工

ワラをよく打ってやわらかくして、縄をなう。縄を巻き取って、編むための台を作って編んだ。実際に袋を編むときには、縦ヒモを準備し、横縄で編んでいく。編む技術はややむずかしいと思われ、中大谷地区では実際に作った経験者から「ほとんどは、自分で作ったが、底を編むところが難しいので母に手伝ってもらった」との話を聞いた。

ワラ縄で編まれた物は、昔の家では囲炉裏などの煤でいぶされていて色が黒くなっていることが多い。また、ワラでできた物は時間がたつと朽ちているものがあった。



図8 背負い袋, 背負い縄. a. 背負い袋 (コシズ). 背負い縄は取り外しができる; b. 背負い縄 (オイソ). ワラ縄の上にシナノキが巻いてある; c. ワラ製の背負い縄; d. ワラ製の背負い縄だが, 部分的にシナノキの皮が編み込まれ, 細い部分はシナノキ製の縄になっている; e. ワラ製の背負い縄の上に巻いたシナノキの繊維がよくわかる.

## 背負い縄

### ①呼び方, 用途, 使用状況

背負い縄は, 地域ではオイソと呼ばれることが多い(図8b). 背負いかご(サラクチ)につけて使用したり, 背負い袋(コシズ)につけたりして使用した. 取り外しができて便利で, 背負い縄だけを持って行き, 帰りに荷物につけて使用することもあった.

現在も使用している人が21%, 過去に使用したという人は50%いた(図2). 大笹地区では, 「大笹は道幅が狭く, 天秤棒で担ぐには狭い幅1 m くらいの道で荷物を背負って歩いた」や, 「農作業の帰りにも必ず何かを背負って帰った. ときには女の人でも, 苦勞しながら米俵1俵60 kgや肥料などの荷物を背負って歩いた」などの話を聞き取り, 車のない時代には背負い縄は大事な道具だったことが想像された. ほとんどが自家製で, 現在も背負い縄を作れる人はいる. 近くの人や親戚からもらう人もいた.

### ②材料

ワラが一番多く, 次にヒルカワ・ヒルガワ・ヒロカワが多く, 布という回答も多かった. ヒルカワ・ヒルガワ・ヒロカワは, 大笹地区の聞き取りではシナノキであった.

他にヒルリ・ヒル・スゲや麻・シュロもあった.

背負い縄の主要部分はワラ縄である(図8c)が, ワラ縄の上にシナノキの皮を巻いているものがあった(図8d, 8e). シナノキの皮を巻くと, ぬれても乾きやすいという理由から大切にされた. 布で作ったオイソもあるという回答があった.

### ③採集

材料の入手方法は栽培が多く, これは背負い袋の場合と同様に, ワラにするイネの栽培を示しているものと考えられる. 里山・奥山に採集に行ったという回答は, シナノキを採集に行ったことを示していると考えられる. シナノキは大笹地区では, 現在スキー場のある山地の近くにしかなく, 採集するには歩いて往復半日以上かかった.

### ④加工

文献にはシナノキの加工には水を使うと書かれている(斎藤, 1999)が, ハチ北高原周辺でも同様な方法をとることがわかった. 実際に直径10 cm程度の幹の樹皮を6月にはがし, その後2ヶ月ほど池に入れておきていねいに水洗いした. ぬめりが取れてくるころには数枚の繊維状になった樹皮がはがれた. このようにシナノキの樹皮の加工には水をうまく利用していることがわかった.

## ミノ

### ①呼び方、用途、使用状況

図 9a, 9b に示したミノは、袖がついているのでソデミノ・ソデミノと呼ばれるものである。他に大ミノ・両手ミノとも呼ばれた。図 9d に示したミノはマエブリ・マエブレと呼ばれ、コシミノという回答もあった。

ミノは雨用や雪用の他、泥よけやカゴを背負う時の背当てなどにも使用した(図 9c)。図 9e はワラ製ミノであるが、下の部分にはスゲが使用されている。背中にあたる部分はいねいに編まれているので背負い心地がよく、休む時にはちょうど下に敷けるように作られている。図 9f のミノはスゲ製で袖がついており、首や肩の部分がはいねいに編まれている。

過去に使用した人の割合が 60% と最も高く、必需品だったことがわかるが、現在は使用している人はほとんどいない(図 2)。しかし、1 人から今でも使用しているとの回答があった。小代区教育委員会収蔵庫や中大谷・耀山・森脇地区の民家には、現在使用されていないミノが大切に保存されていた。倉庫には補修用のスゲが保管されていたが、現在ミノを作れる人はいないと思われる。

### ②材料

ヒルリという回答が一番多く、他にヒル・ヒロリ・ス

ゲ・ミノクサ・ニノクサ・イワキリ・イグサ・ガマ・カヤ・ワラ・ヒルカワ・ヒロガワと様々な回答があった。ヒルリ・ヒル・ヒロリは、聞き取りによればスゲを指している。ミノクサ・ニノクサはミノに使った草の意味と思われるが、これもスゲである可能性がある。

ヒルリを採集に行った経験のある人とともに山へ行き、ヒルリと呼ばれるスゲを確認したところ、それはカンスゲであることがわかった。ただし、カンスゲの生育地周辺には、ミヤマカンスゲ *Carex multifolia* Ohwi var. *multifolia* やオクノカンスゲ *C. foliosissima* F.Schmidt といった類似種が生えていることを実際に確認している。スゲ属植物には類似した種が多いので、ミノに使用されるスゲがカンスゲに限定されるのかどうかについては、さらなる識別の研究が必要である。

アンケートには少数ながらワラという回答があり、現地ではワラ製ミノも実際に保存されていたが、アンケート結果からはミノの材料としてヒルリが圧倒的に多く、この地域ではスゲ製ミノがより一般的に使用されたと考えられる。

ワラとスゲでは雨に濡れた時にどれほどの重さの差があるのかを比較するため、同じ重さの乾燥したワラ(稲ワラ)とスゲ(ミノ材料にするスゲの葉)に同じ量の水をかけ、その後の重さの変化を計測した結果、スゲの方



図 9 ミノ。 a. 袖のついたミノ、ソデミノとも呼ばれる。外側、スゲ製； b. a の裏側(内側)、スゲ製； c. 背当てとして身に着けたところ； d. マエブリ、腹の前につける泥よけミノ。外側にはスゲ製の部分もあるが、内側はワラ製； e. このミノは大部分がワラ製であるが、下の部分はスゲ製になっている； f. 前から見たミノ、肩や首の部分がはいねいに編まれている。

がワラより早く水が切れ、軽くなることがわかった（表4）。同じ重さの乾いたワラとスゲは、見た目にもはつきりとスゲの量が多く、単位面積当たりの重さはスゲの方が軽い。つまり、ワラよりスゲの方が水はけがよく、軽いということがわかった。

### ③採集

採集は奥山まで行ったとの回答が多く、次に里山との回答が多い。前述のヒルリ採集の経験者からの聞き取りによると、ミノ用のスゲは居住地近くにある一般的なものでなく、奥山まで歩いていき、特定のスゲ（カンスゲ）を識別して1日ばかりで採集したということである。ヒルリの採集時期は9月上旬で、株の中央部分の数本だけを採った。この採集方法は「ヒルリ抜き」と呼ばれ、来年に株を残すためにこのような採り方をするのだという。スゲの採集に関するこれらの事柄、すなわち採集場所、採集時期、特定種の識別、採集方法などは、子どもの頃に父親らに連れられて山へ行き、現場で直接教わったということである。

現地で春にカンスゲを引き抜いてみたら、株ごと抜けてしまった。また、冬前には加工には適さないほど葉が硬くてゴワゴワするようになった。このことから、カンスゲの株の中央部分だけ採る「ヒルリ抜き」が9月上旬に行われるのには、相応の理由があると思われる。

### ④加工

スゲはそのまま干しただけだと葉が丸まってしまう、ミノに利用するには適していない。そこで、スゲの葉を採集後半月～2ヶ月ほど池の水に浸け、よく洗った後、天日干しするなどしてよく乾燥させ使用した。

スゲの加工について、「スゲを池に長時間浸けて腐らせ、繊維部分にする」という表現があった。予備的に、カンスゲを材料として、生の葉と池に浸した葉の横断面の切片を作成し、葉の内部構造を比較したところ、池に浸した葉では葉肉細胞部分が腐って減り、表皮と葉脈の繊維質の部分だけが残って扁平になることがわかった。スゲを用いてミノを作る際、あらかじめ池に浸けて葉肉を腐らせ、繊維質だけにする加工法によって、スゲの葉が丸まらずに長持ちし、ミノを作るのに適した材料になると思われた。

表4 同じ重さのワラとスゲに水をかけた時の重さの比較。いずれも乾燥したワラと、ミノ材料にするスゲの葉50gずつに、同じ量の水をふりかけ、その後の両者の重さを計測した。(単位はg)

素材	開始時	直後	10分後	30分後
ワラ	50	72	68	64
スゲ	50	65	62	56

## その他のカゴや植物材料

### ①他の編組製品

タケ製では、アジカ（桑の葉を入れるカゴ）、タケビツ（夏にご飯を入れるもの）、タケミイ（箕—農具）、トウシ（篩—農具）、バイスケ（土砂を運ぶもの）、パッチョウガサ（タケノコの皮の笠）が記入されていた。

ワラ製では、ワラビツ（冬のご飯の保温）、ワラジ、ゾウリ、ツマゴ（足先の保温用）、しめ飾り、稲田の水口のワラ飾りが記入されていた。

他にコリヤナギ製の柳行李や弁当入れ、ガマ製脚絆（ガマ（蒲）の葉で編んだ脚絆）、ヒノキ製笠（ヒノキの枝を細く割って編んだ久須部笠を売りに来た）の記入も見られた。久須部笠については、スギの枝で編んだものとして知られており（兵庫県教育委員会、1970; 美方町文化財審議委員会、2003）、アンケート結果との相違に関しては確認できていない。

### ②結束

稲木（稲を干すための木）の結束には、クズを使用した。クズは牛のえさでもあり、村人総出で採ったが、クズは1年しか使えないという話であった。また、稲木の結束にはフジも使用した。シラクチ（サルナシ）も使用し、そのツルは3年間使えた。

その他、木やツルを採集した時にも枝やツルで結束した。クズ・ツルウメモドキ・アケビ・ツヅラフジ・サルナシ・ヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat ex Planch. などを使用し、アケビは実も食べた。例をあげれば、マタタビを採集した時にもヒモでなくマタタビのツルを使い束ね持ち帰った。また、ガマズミ類 *Viburnum* spp.・イツキ（ヤマボウシ *Cornus kousa* Buerger ex Hance subsp. *kousa*）などでも束ねたという。

### ③茅葺きのカヤ

昭和30年ごろまでは茅葺きの屋根の家もあり、村人は家ごとにカヤ（この地域ではススキ）を採り、共同で屋根の吹き替えを行っていた。各家で分担する量があり、冬前に刈って束ねて保存していた。

### ④コリヤナギ栽培のなごり

コリヤナギはヤナギ科の落葉低木で、枝の皮をむいて柳行李を作った。その需要が盛んだった時には、今の田畑やスキー場より上の場所でコリヤナギを栽培していた。各家のコリヤナギを集める人（元締め）がいたそうである。また、コリヤナギの皮をむく機械も大笹地区の民家に大切に保管されていた。

### ⑤地区の採集場所

採集については村岡区大笹地区を中心に述べてきたが、その手前に位置する中大谷地区の人に聞くと、スゲやシナノキなど大切な資源は地区ごとに決まった採集場所を

利用することになっていた。大笹地区のように、街道から離れて山間の奥まった位置にある集落は、現在の感覚では不便と思われるが、昔は山の資源を最大限利用できる有利な位置にあったといえる。

#### ⑥植物利用に関する知識残存の状況

アンケートの回答率を見ると、呼び方や使用状況については8～9割の回答があり、材料や採集場所については7割前後の回答があった。一方、加工については、背負いかゴは4割、その他の自家製編組製品は2～3割の回答にとどまっており、製品は残っていても加工に関する情報は少ないといえる。現在では材料の採集や、編組製品の製作ができる人は非常に減っており、加工法などを詳しく知っている人はほとんどが80才以上の高齢者であった。

## 考 察

### 自家製編組製品の呼び方、用途、使用状況

本研究では香美町村岡区を中心に小代区・香住区の一部を含んだ地域において、背負いかゴほかの自家製編組製品を調べた。先行研究であげた美方町文化財審議委員会（1999, 2000, 2002, 2003）は旧美方町（現在の香美町小代地区）が調査対象であり、榎（2004）は旧城崎郡長井村大谷（現在の香美町香住区大谷）の昭和はじめごろの暮らしを対象としていた。今回の結果と上記の2資料をあわせて見たところ、自家製編組製品の呼び方や用途は香美町全体に範囲を広げてもほぼ同様であった。ただし、香美町の山田地区では、サラクチと呼ばれる背負いかゴを使用していなかったという回答を得ており、また新温泉町でもほとんど使用していないという報告がある（岡田, 2012）。香美町周辺の地域ごとの使用状況は今後の興味深い課題である。

使用状況に関しては、各製品の過去と現在の使用割合の合計が6～8割と、よく使用していたことがわかった。とくに腰かゴ・ザルについては、現在も使用している割合が4割を超えている。これらのことから、この地域では自家製編組製品が暮らしのなかで重要な役割をはたしてきたものと思われる。

### 自家製編組製品の植物材料

本研究で判明した各道具の主要な素材植物（表1）は、美方町文化財審議委員会（1999, 2000, 2002, 2003）と榎（2004）で示された植物とおおむね同様であった。アンケートには編組製品ごとにさまざまな植物名が記入されていて、多種の植物を利用した場合もあったと思われるが、主要材料としては特定の植物が選ばれていた。

主要材料として選ばれるのには各植物のもつ特性が関係していると考えられる。すなわち、ハイヌガヤの枝はしなやかで曲げやすい、ツヅラフジのツルはしっかり巻きつけられる。マタタビの枝を用いた細工用材料は、タケの材料よりも柔らかく使い心地がよい、シナノキの樹皮の繊維部分は水に強く乾きやすい、スゲの葉は水はけがよく軽いなど、それぞれの植物素材がそれぞれの道具に適した特性を有しているものと考えられる。

地元で利用されている植物は、ハイヌガヤはヒビ・ヒビノキ、スゲはヒルリ・ヒル・ヒロリなど、その地域特有の植物名が使われている場合が多く、植物民俗の視点から貴重である。しかし、ヒルリが実際にどのスゲをさすのか、どこで採集できるのかなどをはっきり答えられる人は極端に少なかった。本研究では、1人のヒルリ採集経験者からの情報により、ヒルリがカンスゲであることを確認したが、スゲ属植物には形態的特徴や生態的特性が類似した種が多く、この地域に現存しているスゲを使ったミノや背負い袋がすべてカンスゲを材料としているかどうかは不明である。スゲに関して材料の採集場所や識別方法の情報がほとんどない現状では、製品に用いられたスゲの葉の詳細な形態観察など、科学的方法によって種の識別がどこまで可能かを探ることが今後の課題である。素材植物の植物学的な種名を決定し、地域の植物名との関係を明らかにすることは、ある地域の植物利用のなかで特定の植物が意識的に選択され、利用されているかどうかを論じるうえで避けられない重要な点である。

植物の採集時期については、シナノキは6月、スゲは9月上旬、ツヅラフジのツルなどは秋以降とおおよそ決まっていたが、これは、シナノキは樹皮に水分の多い6月、スゲは「ヒルリ抜き」しやすい9月、ツルは虫が出にくい秋以降と、それぞれの理由がある。

現地の採集で、ハイヌガヤの枝先がなくなって枯れているものをよく見るようになった。大笹地区の聞き取りでは、最近ニホンジカによる食害が出ており、年々深刻になってきたという。小代区でもヒビの木にニホンジカの食害が報告され（岡田, 2012）、氷ノ山周辺でもニホンジカによる落葉広葉樹林の衰退状況が見られる（藤木, 2014）。ハイヌガヤに限らず、今後、編組製品の材料採集にシカ食害の影響が出てくるものと思われる。

### 加工技術継承の現状

今回調べた自家製編組製品のうち、背負いかゴ、背負い袋、背負い縄は現在も作っている、あるいは作れる人がいることがわかった。背負いかゴの骨組みに用いるハイヌガヤは、いろいろな方法によって曲げたことがわかっているが、補修用にはあらかじめ骨組みの形に曲げ

て保存されていた。またツヅラフジは、10年以上たったものでも補修材料として使用できるよう保存されていた。カゴや補修材料の現物が残されていることで、今後加工や製作技術が継承されやすいと思われる。

一方、腰カゴ、ザル、ミノについては作れる人がいないことがわかった。マタタビで作られた腰カゴとザルは、柔らかくて使いやすく、長年にわたって使用され続けているが、作り手はいなくなった。マタタビの入手について榎(2004)は、『昭和はじめごろムラの周辺至る所で採集できた』と記述している。しかし聞き取りによると、現在では住居付近での入手が難しくなったことがわかった。プラスチック製品も安価で入手できるようになった現在では、わざわざ遠くまで行ってマタタビを採集し、ザルなどを作る必要もなくなった。そして編む材料の加工技術をもつ熟練者たちがいなくなったことにより、継続的に作られることがなくなったと思われる。また、ミノは必需品の道具だったが、これも材料のスゲの採集・加工・製作に関する技術継承の困難さや、雨合羽の登場などにより継続的製作が途絶えたと思われる。

マタタビについて美方町文化財審議委員会(2003)は、戦後スギの植林のため材料が入手しにくくなったこと、熟練者数名が他界や高齢化したこと、そして生活様式が変化したことによりマタタビ細工が消えかけていると記述している。しかし同時に、公民館講座などによって技術の伝承を図りたい旨の記載もあり、マタタビ細工がこの地域では重要で残したい技術であると認識されている。

背負い袋や背負い縄に使われるシナノキの加工や、ミノ用のスゲを加工する際には、水が有効利用されていた。榎(2004)にも、スゲは水につけて加工したという記述がある。シナノキは6月に、スゲは9月にと農繁期に採集するが、水による下処理をすることであまり手間をかけずに編む材料を揃えることができ、農閑期の冬期にじっくりと道具づくりができた。このような水加工技術も生活に密着した、継承されるべき大切な技術であるといえる。

### 兵庫県北部における植物利用の特徴

橋本ほか(2007)は、過去と現在における身近な動植物についての幼少時および現在の動植物の利用経験に関するアンケート調査を行った。その中で材料用に採集したことがある植物としてススキ、フジ、アケビ、クズ、タケ類、ドングリ類などが上位にあげられた。本研究で取り上げた植物のなかでは、ツヅラフジが比較的上位にあげられたが、その用途はわからない。他の植物ではマタタビが『猫じゃらし用』として、またカンスゲが『ワラと一緒にミノ作り』として、それぞれ1回答ずつあげられた。この調査は兵庫県北部地域からの回答数が非

常に少なく、集計結果には阪神地域など兵庫県南部の地域性が強く反映されていると考えられる。上記のカンスゲの回答は、ミノにカンスゲが使われたことを示しており、数少ない兵庫県北部からの回答ではないかと思われる。

本研究で取り上げた植物の兵庫県内における分布をみると、ハイイヌガヤとシナノキは北部の山地にしか分布せず(福岡ほか, 2000, 2003)、カンスゲは北部だけではなく比較的北部の山地に多い植物である(福岡ほか, 2009)。マタタビは県内全域に分布する(福岡ほか, 2001)が、県南部でカゴなどの素材に使ったという例は聞かない。橋本ほか(2007)のリストには、カゴを作る材料としてタケ類があがっていた。県南部では江戸中期や明治時代から農家の副業や職人によってタケのカゴが作られており、タケ細工の伝統工芸品として、三田鈴鹿竹器や三木市吉川町的美吉籠が知られている(兵庫県ホームページ, 付記2参照)。

以上のことから、兵庫県北部ではハイイヌガヤ・マタタビ・シナノキ・スゲ(カンスゲ)などの植物を地域に特徴的な植物として、それぞれの材料にあわせた加工技術によって自家製編組製品の製作に利用してきたことがわかったが、香美町教育委員会村岡区・小代区の収蔵庫などでは、ワラ製やタケ製の民具も見られた。アンケートからも、ワラ製の背負い袋や背負い縄にシナノキの皮を巻く、一部のワラ製ミノにスゲを足して使用する、タケ製のカゴやザルの製品を購入するなど、ワラやタケを生活の中に取り入れていたことがわかっている。

植物利用に関して、宮崎(1985)は福島県奥会津や滋賀県朽木村を例として、ワラの不足により非ワラ文化が発展したと指摘したが、八チ北高原周辺の標高の高い地区では、ワラとマダケの入手しにくさがこの地域における植物利用の知識の豊富さや多様性をもたらしたという可能性も考えられる。しかしながら、香美町には古代から山陰道が通り、江戸時代には北前船など日本海航路として利用されるなど、各地との交流の跡も残されているので、この地域の植物利用について歴史・民俗・流通などの側面からも考察する必要がある。

これまで報告してきた兵庫県北部の自家製編組製品と同様の道具は、山陰地方や積雪の多い福島県などでも使用されている(佐治, 1990; 勝部, 1990; 福島県立博物館・鹿児島歴史センター共同企画, 2007)。そのうち、福島県奥会津地方のザルについてはマタタビ製が多いという共通性があるが、背負いカゴ・腰カゴ・背負い袋・ミノの材料や加工方法は兵庫県北部と同じ場合もあるが、異なる場合もある。ワラやタケのことも含め、今後他地域と比較することによっても、兵庫県北部の植物利用の特徴がより明らかになると思われる。

## 知恵の伝承

スゲのミノを作っていた時代には、9月に親子で山へ出かけることにより、採集場所やスゲの種の識別方法、スゲの株の真ん中だけを抜いて株を残すといった環境に配慮した採集方法など、スゲの採集に関する現場での技術・知恵が次世代へ伝えられていたことがわかった。また、山間地の暮らしで重要な役割を果たす編組製品を持続的に使用できるようにするため、採集や加工の大きな労力をかけてツルやスゲ等の補修用材料を常に準備しておくこともなされていた。このように、植物材料の吟味や加工、編組製品の製作や補修そのものが、この地域の厳しい自然環境を生き抜くのに必要不可欠な知恵が詰め込まれた行為といえるもので、代々伝承されてきたのであろう。

アンケート調査によれば、このような知恵の伝承について知っているのは植物利用に詳しい高齢の人たちに限られており、このままでは途絶えてしまう可能性が高い。しかし、地元では、但馬広域行政事務組合の後援により、公益財団法人但馬ふるさとづくり協会が「但馬ふるさとづくり大学」を設けて地域での学習活動や実践・交流活動を進め（公益財団法人但馬ふるさとづくり協会ホームページ、付記1参照）、また各地区で昔の暮らしを記録に残そうとする活動が行われるなど（香美町歴史文化遺産活性化実行委員会、2014）、「先人の知恵」を残そうとする試みが進められている。本研究で明らかになった結果が、知恵の伝承に役立てばよいと考えている。

## 謝 辞

本研究をまとめるにあたり、香美町教育委員会や香美町老人クラブの皆様にはアンケートに協力いただいた。香美町教育委員会村岡区・小代区の収蔵庫および小代区古代体験の森では民具の現認調査をさせていただいた。香美町村岡区の大笹・中大谷・森脇・耀山の各地区および、小代区の大谷・神水地区の皆様には民具の現認調査、写真撮影、聞き取り等で協力いただいた。以上、お世話になった皆様に厚く御礼申し上げます。

## 文 献

磯貝 勇 (1985a) 日本の民具。岩崎美術社、東京、288 p。  
 磯貝 勇 (1985b) 続日本の民具。岩崎美術社、東京、249 p。  
 宇都宮貞子 (1970) 草木ノート。読売新聞社、東京、302 p。  
 榎 勇 (2004) 北但馬 ムラの生活誌。彩流社、東京、pp. 256-273。  
 岡田正貴 (2012) さらくち、但馬ふるさとづくり大学受講者研究レポート。但馬ふるさとづくり協会、兵庫県、pp. 19-34。  
 倉田 悟 (1969) 植物と民俗。地球社、東京、328 p。

勝部正郊 (1990) 山陰の民具。名著出版、東京、198 p。  
 斎藤令子 (1999) 素材に沿う、奥会津—森に育まれた手仕事。奥会津書房、福島、pp. 14-45。  
 佐治 靖 (1990) タガラ考—背負いカゴの地域差と地域性。福島県立博物館紀要、4、19-72。  
 香美町 (2005) 広報、ふるさと香美、創刊号、平成17年4月号、16 p。[http://www.town.mikata-kami.lg.jp/www/contents/1136529991609/files/17-4s.pdf]  
 香美町 (2015) 香美町過疎地域自立促進計画、平成28年度～平成32年度。香美町、125 p。[http://www.town.mikata-kami.lg.jp/www/contents/1450403386910/index.html]  
 香美町歴史文化遺産活性化実行委員会 (2013) 香美町寺社建築調査、香美町文化財調査報告書第1集。香美町教育委員会、175 p。[http://www.town.mikata-kami.lg.jp/www/contents/1385001668957/index.html]  
 香美町歴史文化遺産活性化実行委員会 (2014) 小城追憶—小城民俗調査報告書—。香美町教育委員会、97 p。[http://www.town.mikata-kami.lg.jp/www/contents/1400630800550/index.html]  
 佐々木由香・小林和貴・鈴木三男・能代修一 (2014) 下宅部遺跡の編組製品および素材束の素材からみた縄文時代の植物利用。国立歴史民俗博物館研究報告、187、323-345。[http://id.nii.ac.jp/1350/00000294/]  
 名久井文明 (2011) 樹皮の文化史。吉川弘文館、東京、260 p。  
 長沢 武 (2012) 野外植物民俗事苑。ほおずき書籍、長野、443 p。  
 橋本佳延・坂田宏志・高野温子・三橋弘宗・布施静香 (2007) 過去と現在の里山における身近な動植物の利用 人と自然の博物館利用者へのアンケート調査から。人と自然 Humans and Nature、18、151-162。[http://www.hitohaku.jp/publication/HN18\_p151-162-1.pdf]  
 兵庫県教育委員会 (1970) 小代、小代地区民俗資料緊急調査報告書、兵庫県民俗調査報告2。兵庫県教育委員会、193 p。  
 兵庫県の歴史散歩編集委員会 (2006) 兵庫県の歴史散歩 下 東播磨・西播磨・丹有・但馬、歴史散歩28。山川出版社、東京、275 p。  
 福岡誠行・黒崎史平・高橋 晃 (2000) 兵庫県産維管束植物2。人と自然 Humans and Nature、11、85-104。[http://www.hitohaku.jp/publication/r-bulletin/No112000085.pdf]  
 福岡誠行・黒崎史平・高橋 晃 (2003) 兵庫県産維管束植物5。人と自然 Humans and Nature、14、111-162。[http://www.hitohaku.jp/publication/r-bulletin/No14111.pdf]  
 福岡誠行・黒崎史平・高橋 晃 (2009) 兵庫県産維管束植物11。人と自然 Humans and Nature、20、139-189。[http://www.hitohaku.jp/publication/r-bulletin/No20\_15-1.pdf]  
 福島県立博物館・鹿児島歴史センター共同企画 (2007) 樹と竹—列島の文化・北から南から—。福島県立博物館、福島、119 p。  
 藤木大介・酒田真澄美・芝原 淳・境 米造・井上徹夫 (2014) 関西4府県を対象としたニホンジカの影響による落葉樹林の衰退状況の推定。日緑工誌 39 (3)、374-380。[http://doi.org/10.7211/jjsrt.39.374]  
 細見末雄 (1999) 丹波・但馬の植物民俗。丹波新聞社、兵庫、188 p。  
 美方町文化財審議委員会 (1999) 小代の民具2。美方町の文化財

第18集, 美方町, pp. 33-34.

美方町文化財審議委員会(2000) 小代の民具 3. 美方町の文化財

第19集, 美方町, pp. 28-29.

美方町文化財審議委員会(2002) 小代の民具 5. 美方町の文化財

第21集, 美方町, pp. 26-30.

美方町文化財審議委員会(2003) 小代の民具 6. 美方町の文化財

第22集, 美方町, pp. 75-81.

宮崎清(1985) 藁1, ものと人間の文化史 55. 法政大学出版, 東京, 369 p.

宮本常一(2005) 民具学試論, 宮本常一著作集 45. 未来社, 東京, 326 p.

## 付 記

- 1 公益財団法人但馬ふるさとづくり協会ホームページ(2016年9月8日閲覧), [<http://tajima.or.jp/furusato/>]
- 2 兵庫県ホームページ, 兵庫県の伝統工芸品の紹介(2016年9月8日閲覧), [[https://web.pref.hyogo.lg.jp/ie07/ie07\\_000000016.html](https://web.pref.hyogo.lg.jp/ie07/ie07_000000016.html)]
- 3 米倉浩司・梶田忠(2003-)「BG Plants 和名-学名インデックス」(YList)(2016年9月8日閲覧), [<http://ylist.info>]



付表2 編組製品ごとの調査データ。各表には編組製品ごとのアンケート結果を集計して示したが、入手法については聞き取りによって得られた結果も加えた。アンケートは2014年11月に回収し、集計には複数回答もそれぞれ数に入れた。また、材料名は原則としてカタカナで表記し、一部漢字も使用した。

1. 背負いかご

質問	回答 (人数)	回答率等
呼び方	サラクチ (36), サルクチ (2), 背負い (1), 無回答 (2)	95%
使用状況	現在も使用 (10), 過去に使用 (20), 使用していない (10), 無回答 (1)	98%
入手法	ほとんどが自家製。 現在も作っている人がいる。 もらう (12), 義兄, 集落の人, 近くの集落の人, 先輩	記入者分のみ
材料	骨組み・・・ヒビ (11), ヒビノキ (4), ガエ (3), ガエマツ (1), ガヤ (1), ヒノキの枝 (3), スギの枝 (1), タケ (2), プラスチック製のかごを背負いかごに使用 (1) 巻く物・・・カズラ (8), ツヅラ (6), 青ツヅラ (1), ワタタ (3), クズ (1), ツル (1), ワラ縄 (3), シュロのヒモ (1), ビニールヒモ (1), プラスチックヒモ (1) 無回答 (12)	71%
採集場所	里山 (20), 奥山 (8), 近く (5), 栽培 (1), 無回答 (13)	68%
加工	骨組み・・・ハイイヌガヤは生のまますぐ曲げて形にして組む。 ・ヒビノキを熱湯につけて曲げる。 ・秋から冬にかけて採取した枝を火にあぶり、曲げるなどして形を整える。 ・スギ, ヒノキの小枝は火であぶって曲げる。 巻く物・・・天日干し。使うとき水に浸けてやわらかくして使用する。 ・虫が出るため、秋～冬に採集する。 無回答 (24)	41%

2. 腰かご

質問	回答 (人数)	回答率等
呼び方	サデコ (36), サレコ (1), ソデコ (1), ビク (2), コシズ (1), 無回答 (1)	98%
使用状況	現在も使用 (17), 過去に使用 (18), 使用していない (5), 無回答 (1)	98%
入手法	自家製が多い。 現在は作っている人がほとんどいない。 もらう (9), 近所の人, 知人 購入 (5), 漁具店, 雑貨店, 道の駅で郷土品として販売, 安木節演芸館	記入者分のみ
材料	ワタタ (マタタビ) (20), ワタダ (2), タケ (9), ヤナギ (1), カズラ (2), ツヅラカズラ (1), 無回答 (11)	73%
採集場所	里山 (17), 奥山 (9), 近く (3), 栽培 (1), 無回答 (14)	66%
加工	・ワタタは山から今年伸びた新しい枝を採ってくる。切り口を水で浸し、皮をむき、大きさに応じて2～4分割したもので編む。 ・ワタダは山から採ってきて、皮をむき、半分に割り、天日干しする。 ・ワタタは水に浸けて、表面がきれいになってから細く割って使用する。 ・ワタタは2～4に割り、シズを取り湯で煮る。 ・マタタビ (ワタタ) は泥に浸けて皮をはぎ乾燥する。 ・芯にはタケを使うこともある。 ・タケを細く割って編む。 ・口の所を細くする時には、小さな鉢を乗せて形を作っていた。 無回答 (31)	24%

## 3. ザル

質問	回答 (人数)	回答率等
呼び方	ソウケ (24), ソーケ (1), 丸ソウケ (4), あみソウケ (1), 米洗いソウケ (1), ワタタソウケ (1), タケソウケ (1), ザル (15), イカケ (1), 無回答 (4)	90%
使用状況	現在も使用 (20), 過去に使用 (12), 使用していない (2), 無回答 (9)	78%
入手法	自家製が多い. 現在は作っている人がほとんどいない. もらう (7) 購入 (7), 昭和 20 年ごろまで他村の人が売りに来ていた, 行商人, 道の駅で郷土品として販売	記入者分のみ
材料	ワタタ (マタタビ) (24), ワタダ (1), タケ (11), ヤナギ (1), ツヅラカズラ (1), ツル (1), 無回答 (11)	73%
採集場所	里山 (18), 奥山 (8), 近く (1), 無回答 (16)	61%
加工	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワタタの切り口を水で浸す. 使用前に皮をはがすとまっ白くなり, 大きさに応じて 2~4 分割して編んでいく.</li> <li>・ワタダは山から採ってきて, 皮をむき, 半分に割り, 天日干しする.</li> <li>・家で陰干しする.</li> <li>・ワタタ (マタタビ) は皮をむいて乾燥して保存し, 冬仕事にした.</li> <li>・ワタタは 2~4 に割り, 先にシズを取り煮る.</li> <li>・タケの皮の部分を薄く割り, 細くして使う.</li> </ul> 無回答 (32)	22%

## 4. 背負い袋

質問	回答 (人数)	回答率等
呼び方	コシズ (33), 背負いコシズ (2), 背負い袋 (1), オイコ (1), アジカ (1), 無回答 (3)	93%
使用状況	現在も使用 (8), 過去に使用 (21), 使用していない (6), 無回答 (7)	83%
入手法	ほとんど自家製. 現在も作れる人はいる. もらう (5), 義父, 近所の人 購入 (2), 郷土品として販売, シュロは購入	記入者分のみ
材料	ワラ縄 (23), 縄 (3), ヒルカワ (3), ヒロガワ (1), スゲ (1), ヒルリ (1), ヒル (1), 麻 (2), ツタ類 (1), シュロ (1), シウロ (1), ビニール (2), 無回答 (13)	68%
採集場所	里山 (6), 奥山 (7), 近く (2), 栽培 (12), 無回答 (22)	46%
加工	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワラをよく打ってやわらかくして, 縄を作り編む.</li> <li>・縄になって巻き取って, 編むための台を作って編んだ.</li> <li>・縦ヒモを準備し, 横縄で編んでいく.</li> <li>・スゲは長時間池に浸し繊維だけにしておく.</li> </ul> 無回答 (28)	32%

5. 背負い縄

質問	回答 (人数)	回答率等
呼び方	オイソ (36), 背負いヒモ (1), 無回答 (4)	90%
使用状況	現在も使用 (9), 過去に使用 (21), 使用していない (5), 無回答 (7)	83%
入手法	ほとんど自家製. 現在も作れる人はいる. もらう (5), 親戚 購入 (2), 集落の縄作り名人	記入者分 のみ
材料	ワラ (28), 縄 (1), ヒルカワ (3), ヒルガワ (3), ヒロカワ (3), ヒロガ ワ (1), スゲ (1), ヒルリ (1), ヒル (1), 麻 (1), シュロ (2), 布 (4), 無回答 (7)	83%
採集場所	里山 (8), 奥山 (7), 近く (8), 栽培 (15), 無回答 (13)	68%
加工	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワラをなつて作る.</li> <li>・肩の部分は平らに作る.</li> <li>・ヒルガワ (シナノキ) の木の皮をむく. 池・水につけて腐らせて, 皮を取り洗って仕上げる. 天日にあたると, 茶褐色になる. ワラが主体だからヒルガワ (シナノキ) を上に巻いて出るようにする.</li> <li>・ヒルガワを泥につけ 10 日~20 日 天日干し. 稲ワラと同時になう. (雨にぬれても早く乾き, 軽くて使いやすい.)</li> <li>・ヒルカワの皮をはいで水に浸けてなめす. 薄くはいで編んだり, なつたりする.</li> <li>・スゲは長時間, 池などに浸しさらす.</li> <li>・祝物, 贈物, 大事な物は布を細くして編んだ物を使った.</li> </ul> 無回答 (31)	24%

6. ミノ

質問	回答 (人数)	回答率等
呼び方	ミノ (17), ソデミノ (16), 大ミノ (1), 両手ミノ (1), マエブリ (8), マ エブレ (1), コシミノ (4), 無回答 (1)	98%
使用状況	現在も使用 (1), 過去に使用 (25), 使用していない (12), 無回答 (4)	90%
入手法	ほとんど自家製. 現在は作れる人はいない. もらう (7), 親戚	記入者分 のみ
材料	ヒルリ (16), ヒル (3), ヒロリ (1), ミノクサ (ヒロの葉) (1), スゲ (1), ミノクサ (1), ニノクサ (1), イワキリ (2), イグサ (1), ガマ (1), カ ヤ (1), ワラ (5), ヒルカワ (2), ヒロガワ (シナノキ) (1), 無回答 (8)	80%
採集場所	里山 (12), 奥山 (16), 近く (6), 無回答 (10)	76%
加工	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スゲは池などに長時間浸け, 繊維だけにしておく.</li> <li>・ヒルリは池に半月ぐらいつけ, よく乾かして使用する.</li> <li>・ヒルリやヒルガワの縄の部分は, いずれも水に浸して繊維だけ利用する.</li> <li>・9月~10月頃山に採りに行き, ヒルリ (スゲ) を泥水の溝に 10 日ほどつけて, 天日干しにして使用する.</li> <li>・ワラでも良いが, ヒルリが良い. 軽いから. ヒルリ引きと父が言っていた.</li> <li>・山からミノ草 (ヒロの葉) を採って来て, 近所の人に作ってもらった.</li> <li>・ニノクサは乾かして, 冬仕事に作った.</li> <li>・祖父の作ったものはあるが加工法はわからない.</li> </ul> 無回答 (26)	37%